

だし、全世界に配布された。執筆者が他の仕事で忙しすぎて、原稿を改訂する暇がなかったからである（一次稿の大部分も、列車の中で書かれた）。彼は、通常「数学者」と呼ばれるが、他の分野の専門家は違和感を覚える。なぜなら、多くの分野で「二十世紀最大の業績」といわれるものが、この人物によってなされているからである。経済学も例外ではなく、彼が（多分、他の仕事の合間に）書いた三つの論文が、その後の数理経済学の基本方向を規定した。その業績の重大さは、時間がたつほど強く認識されてきている。

この男——生国ハンガリーでの呼び方では、ノイマン・ヤーノシユ。普通は、米国での呼び名ジョン・フォン・ノイマンで知られている——は、あるとき、「あなたの最大の業績は何か？」という質問に、「ヒルベルト空間の自己随伴作用素の理論、量子論の数学的基礎付け、およびエルゴード定理の数学的基礎付け」と答えた。この中に、「E D V A C 報告書の第一次稿」は含まれていない。

文化大革命との遭遇

なかじまひねお
中嶋嶺雄
(東京外国語大学長)

一九六六年から六七、六八年にかけては、中国の文化大革命が大きく燃えあがった時期であり、また同時に私の人生にとっての転換期でもあった。大学院に在学中の私は、

六六年四月、母校で教鞭をとることになり、東京外大へ赴任した。

世界を震撼させた紅衛兵の大群が北京の天安門広場に出現したのは、その年の八月二十日のことである。すでに『現代中国論』などの著書も出していた私は、是非中国を訪れて自分の目で状況を確かめてみたかった。たまたま孫文生誕百周年記念訪中団の一団員として訪中する手筈が整ったのだが、当時は国家公務員の共産圏渡航が禁じられていて、折角の機会なのに文部省から許可が出なかった。人事院総裁に直訴し、ようやく渡航許可を得たのだが、訪中団はすでに出発しており、私は一行に遅れて単身訪中することになった。

六六年十一月十日、私は初めての外国としての香港に一泊した翌日、国境の深圳で半日も待たされた揚げ句に、ようやく共産中国の土を踏むことができた。国境を跨ぐやそこはもう文化大革命の紅紅烈烈たる世界であった。

広州に一泊した後、暗闇のなかを紅衛兵集団が蠢動している夜の北京に到着、翌十一月十二日に人民大会堂で開かれた孫文生誕百周年記念の式典になんとか間に合ったのである。だが、壇上の中国要人のなかに肝心の劉少奇国家主席の姿がない。鄧小平党総書記もいない、と訝^{まが}っていると、この兩人のみが舞台の右手から遅れて登場してきた。しかし、会場からは拍手も起こらず、報道陣のカメラもフラッシュを焚かない。その瞬間に私は、「これが文化大革命だ」と直感したのである。

式典の主役は周恩来総理だったが、毛沢東礼讃に終始し、最後には『毛語録』を振り

かざして「毛沢東思想万歳！」、「毛主席万歳、万々歳！」としわがれ声で絶叫した。この間、劉少奇は苛々して顔面蒼白、禁煙のはずのヒナ壇で立て続けにタバコを吸っていた。彼は、この日を最後に二度と公衆の面前に姿を現すことなく、惨めな死を遂げたのであった。一方、鄧小平はというと、「今に見ている」といった凄惨な形相で周恩来をにらみつけていたのが印象深い。

やがて私は上海を訪れた。黄浦江沿岸の外灘には早くも各地の武闘の壁新聞が出ていた。それらを撮影していて紅衛兵糾察隊に追い回されたりもしたが、そのとき、路上で半分ちぎれたビラを拾った。そこには劉少奇が党内第一の実権派であり、第二の実権派は鄧小平であると書かれていた。当時はまだ文革がいかなるものか明確でなかっただけに、私はこれらの事実から、文化大革命を権力闘争の大衆運動化として位置づける視点を探したのである。

中国での貴重な文革体験の後、私は香港に約四十日滞在して研究と分析を続けた。その香港で私は、実に衝撃的な情報入手した。あれほどの権威を誇っている毛沢東が実は党内で孤立し、密かに北京を脱出して上海から文革の烽火をあげ、権力を奪回したのだという。この重要な情報をさまざまに検証してみると、それが真実であることを私は確信した。

当時私は、『読売新聞』の混成機動特派員を委嘱されていたので、帰国後、このストーリーを綴った記事を書いた。ところが一面全部を費やしたこの記事が発表される前夜、

編集局会議でストップがかかったのである。筋書きがあまりにも衝撃的なので社としては掲載を中止し、その替り座談会を開いて私の発言として一部を発表することになった（同紙一九六七年一月二十三日付）。私の手元には、輪転機が回る直前の校正刷りが今も保存されている。

このような顛末を知った当時の『中央公論』編集次長・粕谷一希氏は、同誌に思う存分書くことを勧めてくれた。私が見つけた論文題名は「激動の中国から帰って」というものであったが、それを粕谷氏は「毛沢東北京脱出の真相」として発表し、『中央公論』一九六七年三月号)、国内外で大きな反響を呼んだ。

文革礼讃の論調が圧倒的だった当時のマスコミや論壇では、つらいことも多かったが、文革に遭遇したことによって、六八年秋から「造反有理」をふりかざしてキャンパスを封鎖した全共闘の学生諸君と対決したときにも、私は持説を展開して譲らなかつた。

私の文革体験のお蔭で、のちに副総統のとき来日された台湾の李登輝さんとお会いしたとき、開口一番、「私は『毛沢東北京脱出の真相』以来のファンです」と言われた光栄にも浴している。以来、李登輝さんご一家とは家族ぐるみのご厚誼をいただくようになった。

こうして文化大革命は私にとってのドラマでもあったが、この時期を通じて私は、若き日のマルクス主義への絆を明白に断つこともできたのである。

私たちが 生きた^下 20世紀

文藝春秋 [編]

20世紀 再発見!

多様さ、豊かさ、そして新しさ……

「20世紀」には大きな可能性が潜んでいる

文春文庫 今月の新刊 定価(本体676円+税)

私たちが生きた20世紀 下

文藝春秋編

編 6 12

文春文庫



676
+税



9784167217747



1920120006760

ISBN4-16-721774-0

C0120 ¥676E

定価(本体676円+税)

編 6 12



文春文庫

九死に一生を得た戦争の体験。時代の荒波を逞しく乗り越えた三代の物語。世界と日本の歴史を変えた、人そして事件……。369人が個々のまなざしの中にこの百年の真実を浮び上らせる。さまざまなことがあったこの百年を知り、歴史に学ぶとき、新しい世紀を生きる英知と勇気が生まれる。簡明な「20世紀年表」付き。永久保存版!

繁栄の世紀、戦争と革命の世紀、科学・技術の世紀、新しい芸術と文化の花ひらいた世紀、性の解放の世紀、欲望の世紀……

369人が個々のまなざしの中にこの100年の真実を浮び上らせる——「私の20世紀」